

「小さくなった母」(50分)

対象/中学生・高校生

1. プログラムの趣旨

中学生の時期は、自我意識が強くなり、自分の判断や意志で生きていこうとする自立への意欲が高まってくる。そのため父母や祖父母の言動やしつけに反抗的になりがちである。本作文の「私」は、震災の混乱の中でも、自分を支える母親の姿から、母親の無償の愛情について考えている。今の自分も同様に周りから支えられ、愛情を注がれて生きていることを感じ、親子の信頼と愛情の深さに気づき、家族への敬愛の念を深めさせたい。

2. ねらい

このプログラムは中学校学習指導要領の道徳・内容4-(6)「父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く」を受けている。指導に当たっては、この時期の自分と家族のかかわりや、家庭生活の在り方が人間としての生き方の基礎であることを十分理解できるようにすることが大切である。その際、家族の中で自分はどのような役割を果たせばよいのかを考えさせたい。そして、家族に対する敬愛の念を深めながら、家族の一員としての自覚をもって積極的に協力していこうとする意欲を育てたい。

3. 展開

段階	学習内容	教師の支援・指導上の留意点
導入 (5分)	①日常生活を振り返り、今の時点で思う家族に対する思いを確認する。 ・家族の言動で、嫌だなと感じたことはありますか。それはどんなことですか。	・家族に対する思いを振り返ることで、本時の資料への導入を図る。 ・日常生活を振り返り、家族の言動に対して不満なことについて考えながら、発表させる。
展開 (35分)	②作文「小さくなった母」を読み話し合う。 ・私は、母が震災後あれこれ頼み事をするようになったことをどう思っていただろう。 ・私は、母に「ルールだから仕方ないよ」となだめられたあと、どんなことを考えていたのだろう。 [中心発問] ・私は、「母の縮んでいく身長はいたわることで遅らせることができそうな気がする」という言葉にどんな思いを込めたのだろう。	・単に「めんどくさい、用が多い」という気持ちと「母を協力し助けたい」という両方の気持ちがあることに気づかせる。 ・震災で混乱した状況の中でも、私に社会のルールを諭したり、父の無事を信じ、私を勇気づけたりする母の強さや偉大さ、尊敬の気持ちに気づかせる。
まとめ (10分)	③自分を振り返る。 ・今まで自分は、家族のことをどんなふうにも思っていたかを考えてみよう。 ④教師の話聞く。	・友だちの意見を聞き、自分に重ねて考えさせる。 ・望ましい家庭生活をイメージさせたい。

作文：「小さくなった母」 仙台白百合学園小学校六年 一竹田 悠希一

出典：「宮城県連合小学校教育研究会国語研究部会」編 作文宮城60号〈特別編〉『あの日の子どもたち』2011.3.11 東日本大震災の記録集から

「悠ちゃん、カーテン取り付けて。」

「悠ちゃん、あそこのとびらの上をふいてくれる。」

「悠ちゃん、マーヤの散歩をお願いね。」

「悠ちゃあん……………」

近ごろの母は、一日に何回も私の名前を呼んでは、あれして、これしてと用事を言いつける。三月十一日の東日本大震災の日から、何かと言うと私を呼んでは、あれこれ頼み事をするようになった。

そんなとき、私は心の中で、

(そんなこと、自分でできるでしょう。)

と思うけれど、ぼやきながらも、

(まあ、いいか。お母さんは私より小さいんだから。)

と、いたわりの気持ちで動いてしまう。

母は最近小さくなった。

母の身長は一五七センチメートル。今年の四月に学校で測定したとき、私の身長は一五四センチメートルだったので、本当は母の方が少しだけ大きいはずだが、背比べをすると、私の方が明らかに大きい。それに、私は三才からバレエとピアノを習っているのだから、腕も指も母よりずっと長く、高いところは私の方が楽に届く。

それを知ったとき、母がとても小さく思え、いたわってあげなくちゃという気持ちが出た。

震災の前までは、宿題が早く終わって母が忙しそうにしているところを見て私が、

「何か手伝うことある。」

と聞くと、母は忙しい中でも余裕があるときは、

「じゃあ、これ、お願い。」

と言うけれど、真剣に忙しいときは、

「大丈夫。」

と、私に言い切っていた。大丈夫と言いながら、ばたばた動いている母にもう一度、

「本当に、大丈夫なの。」

と聞くと、

「手伝わないことも手伝いのうち。」

と、意味不明なことを言っていた。多分、私に用を頼むと説明が必要だし、また、物を割ったり、こぼしたりしたら、余計に忙しくなるから、大丈夫と言っているのだと感じて少しさみしい気持ちになっていた。

私は、ペットに水をあげるときも、床に水をぼたぼた垂らしながら歩いたり、トイレの電気は五十パーセントの確率で消していなかったりで母によく叱られる。

「悠ちゃんは、のんびりやさん。」

と、母はいつも言う。

三月十一日の震災の後、部屋の片付けや食料の買い出しや町内会の配給など、母一人では絶対にやりきれないことが多すぎた日のこと、猫の手どころか何の手でも借りたいと思ったのか、母はそのときから、

「悠ちゃん、悠ちゃん。」

と、私の名前を呼び出した。

「悠ちゃん、これお願い。」

「悠ちゃん、配給所に一人で行ける。」

と、私に次々に用を頼む。

食料配給所は自宅から五分くらい先の公園で、一人でも行けるけど、行ってどうすれば

よいのか分からなかった。

「行って、どうすればいいの。」

と、母に聞くと、

「お母さんも分からないから、行ってからその人に聞いて。」

と言われ、どうしようと不安な気持ちでどきどきしながら配給所に向かった。配給所には、大勢の人が並んでいた。

「一列に並んでください。」

近所の友達がいた。友達といっしょに列の後ろに並んで、ジャムパンとあんパン、バナナ、フィッシュソーセージ二本をもらって帰った。あんパンをおいしそうに食べる母を見て、ほっとしてうれしかった。テレビの動物番組で見た「狩りから帰って子どもに獲物を与える母ライオン」になった気分だった。

食料買い出しのため、大雪の中、母と私は交替しながら四時間並んだ。店内に入れる順番になったとき、店員さんから、

「交替で並んでいたでしょう。ルール違反なので、一人分の購入数です。」

と言われ、私は何だか腹が立って、

「見ていたなら、注意してくれればよかったですか。」

と、文句を言ってしまった。

すると、母は、

「悠ちゃん、ルールだから仕方ないよ。」

と、私をなだめた。落ち込む母を見て、私はもっと店員に文句を言いたくなった。店員の言うことは正しいのかもしれないけれど、とても意地悪に聞こえた。

でも、寒い中で四時間ずっと待っていた人たちのことを考えてごらんと母に言われて仕方ないと思った。そういうふうにかんがえることができるなんて、母はやっぱり大人なんだな。

購入数は人数分かける十点だったので、本当なら二十点の食品が買えていた。でも、私たちは二人で一人分の十点しか買えなかった。母と私で五点ずつ好きな食品を買った。私は母の好きな物ばかり選び、母は私の好きな物を選ぶという不思議な買い物だった。

母が食べものを分けるとき、私の分量が母のよりずっと多くても、私は食べざかりだし、母はもともとあまり食べないので、当たり前に分け方だと思っていた。でも、今は違うような気がしている。もちろん、私にたくさん食べさせたいという母の気持ちは知っていた。でも、前はそれに甘えていたように思う。だから、今は母にもたくさん食べてほしいと思う。母がおいしそうに食べる姿を見るとほっとするし、とてもうれしい。震災があつてから、母を大切に思う気持ちがとても強くなった。母を気づかうことができるようになった。

地震が起こったとき、私は学校の専用バスに乗っていた。大きなバスがブランコのようにゆれたが、なぜか泣いたり、叫んだりする子はいなかった。マンホールから下水がぼこぼこことあふれ出してきた。歩道のコンクリートも盛り上がり、ゆれがおさまってから、バスが走り出した。

「悠ちゃあん。」

バス停で母が待っていて、私のことを抱きしめてくれた。

震災のとき、父は山形の会社で仕事をしていた。父に連絡をしたかったが、電話はつながらなかった。

「お父さん、大丈夫かな。」

私は不安でたまらなかった。夜もずっと眠れなかった。

「大丈夫。帰ってくるから。」

と、母は笑顔で言ってくれた。

三日後の朝、何も言わずにとつ然父が帰ってきた。

「大丈夫か。」

父は家に転がり込んできて叫んだ。父の顔を見て、私は不安という言葉を中心の中にしまい込んで冷静にこたえた。

「お帰り。こっちは、大丈夫だよ。」

父は、家の電気と水が復旧するまで仙台にいた。そして、山形の会社に戻った。

「いってらっしゃい。」

母は少し心細気だった。

私の身長はどんどん伸びるし、体格も大きくなっていく。それは自然なことだ。そして、母の身長は私が成長すればするだけ縮み体格も小さくなっていく。私が成長するだけ、母は年をとっていきのだから……。

自分の身長が伸びることは止められないけれど、母の縮んでいく身長はいたわることで遅らせることができそうな気がする。

「悠ちゃん、悠ちゃん。」

小さくなっていく母。文句が多くて、何でも頼んでくる母。時々めんどくさくなるが、母に頼られるのはやっぱりうれしい。用を頼まれ過ぎて、

(もう、いい加減にして。)

と思うこともあるかもしれないけれど、今の気持ちを思い出して、母に頼られる大きな娘になりたい。

精いっぱい親孝行するからね。お母さん。

(指導 塚本 由美)